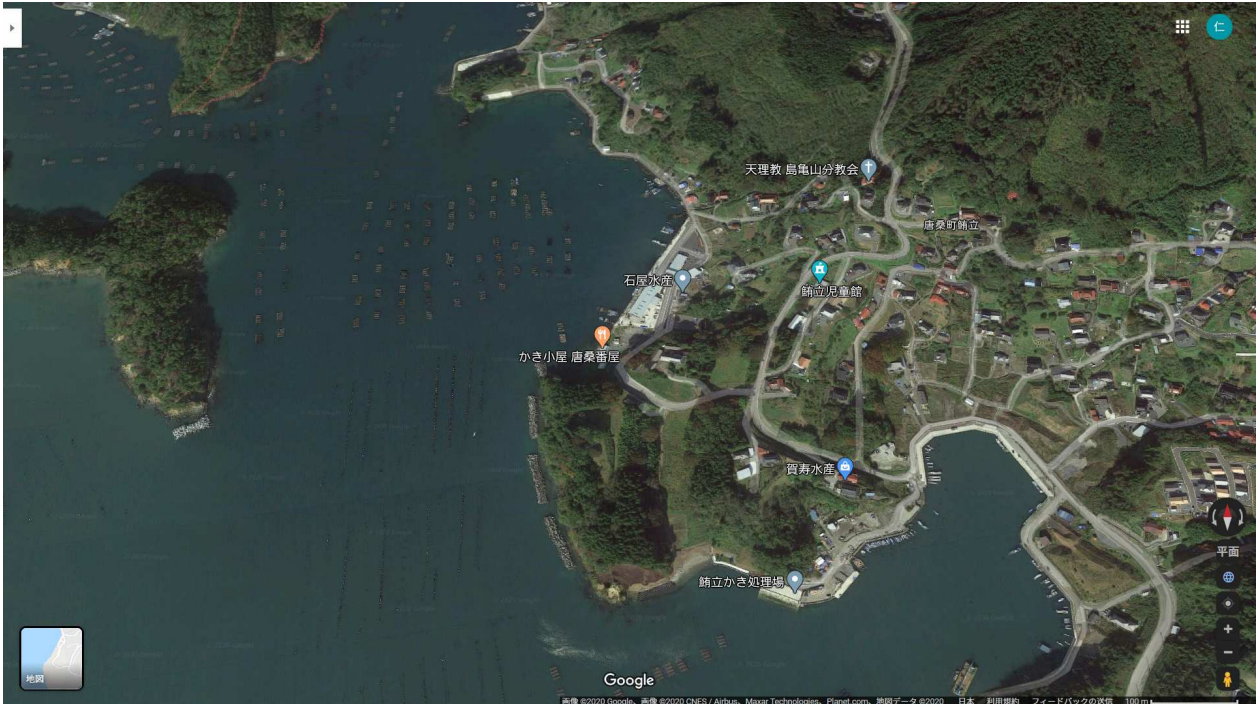


東日本大震災の地へ その4



航空写真で見る、気仙沼市の唐桑半島にある鮪立の浜(右下)と藤浜(中央上)の位置

2011 年秋、再び気仙沼市唐桑へ

11月初めの連休を使い、今回も同じ気仙沼市の唐桑へ出かけた。3日の夜、気仙沼市内で夕食をとってから RQ 市民災害救援センターのボランティアセンターに着いた。その夜も賑やかな酒宴の場になっていて、そこに加わりついでに明日の作業の話聞いた。

実は今回は、土地の主産業である牡蠣(かき)養殖の現場で作業に参加できればと思っていた。明日は、四人だけがその仕事だと聞き、「今からでも入れないか」と尋ねてみた。当初予定のメンバーの一人が私に譲ってくれたので、翌朝はその現場、この唐桑地区の藤浜の集落に出かけた。

4日朝の出発前、9月の時と変わらぬセンター長の星野さんと助手のサイさんに再会した。そして偶然再会した酒井さんとシゲさんとが一緒だった。しかし、この時漁港に向かったのは初対面の女性三人で、班長の竹井さ

んは広島県の県庁職員、岩槻さんは東京のOL、徳野さんは元派遣者社員という顔ぶれだった。

藤浜でのロープ作業

前回の鮪立(しびたち)の北隣の集落が藤浜だった。そこに出かけると、今日で第三陣目だという第一生命の社員二十数人が、揃いの黄色のジャンパーを着て集まっていた。企業の社会貢献事業の一環で、第四陣までの派遣事業を JTB の企画で続けていると聞いた。

皆の前に立つのは、漁師の鈴木さんと畠山さん。この日の作業手順を説明していた。手に持つ帆立貝には、無数の牡蠣の稚貝がこびりついている。この貝を化学繊維のロープをよじりを解いて、そこに一定間隔で差し挟む。単純作業だが午前中にこの個数をこなすと、午後は沖合に出て、このロープを筏(いかだ)に吊るす作業が待っていると聞いた。船で海に出られると思うと、大いにやる気になる。作業台を四人で囲むように座り、黙々と作業

を進めた。途中で徳野嬢が別の作業台に移動。代わりに第一生命の社員K氏が来たのを初めとして、他のメンバーも時々入れ替わるようになった。しかし未熟な私は早く慣れようと、その場から離れずにいた。実際、素人を良いことに差し挟む感覚を間違える人もいて、漁師さんたちが後始末をしていた。

正午には第一の社員が現場を離れ、近くのレストランにバスで向かった。静かになった浜で漁師さんと鈴木さんの母三人と我々で、お握りとみそ汁で簡単に昼飯とした。お母さんは、コーヒーまで出すサービスのいれようだ。話好きの鈴木さんは、津波が来た日のことも話してくれた。

この目の前が鈴木家の建っていた場所だと言う。海岸との高低差は殆どない。そして頭上の電信柱の電線の所、7,8mはあるだろう高さまで津波は上がって来て、浜全体を覆うように襲ったと言う。こののどかな風景からは想像できないことだった。

鈴木さんは浜にいて、これは大きいぞと悟った時、一瞬呑まれるのではと戦慄が走ったという。目の前の車に飛び乗り南側の坂を駆け上った直後に津波が襲い、ぎりぎりの所で逃れたそうだ。先に家族は避難しており、幸い身内に犠牲者を出さずにすんだという。今は山向こうの内陸にできた仮設住宅から通いになったそうで、道具類を置くテントだけを浜に建てて使っていた。

牡蠣養殖の再建

唐桑湾にあった養殖筏は、津波の引き波にあって流出。原型を留めたものは、元の一割にも満たないと言う。しかし、養殖再開は緊急の課題で、再開できても早くて三年目の収穫だと思われた。種牡蠣としての帆立についた稚貝は、同じく被災した石巻のそれが手に入らず、今回は北海道厚岸(あつけし)からの

ものを確保したという。ところが、予想外のことが海の中で起きていた。

それは皮肉にも津波が湾内に滞留していたヘドロなどを一掃してくれたことだと言う。詳しくはわからないが、牡蠣の生育に関わる海中の酸素量が大きくなり、海面を覆っていた筏も少なく陽が差し込み、その分牡蠣が海の栄養を取りやすくなったと言うのだ。おかげで三年かかる牡蠣の成長が、早ければ来年秋にも収穫できる大きさにまでなる可能性が出てきた。

漁師の鈴木さんにとっては、ようやく復興の道筋が見えた瞬間だったという。外洋船の航海士だったお父さんが自宅を預かるお母さんと手がけていた養殖事業だった。その収入の魅力もあって、脱サラして後を継いだ鈴木さんだった。筏の壊滅と自宅の流出とは、そこに降りかかった最大のピンチだった。それが思わぬところで、再建の展望が開けてきたという訳だ。

周囲がざわつき、第一生命の社員が帰って来たことがわかった。午後も午前と同じ作業に生を出した。そして私にも、沖へ出る番が回って来た。鈴木さんの船頭で、静かな内海へとエンジン船で向かった。天気が好天となり、海岸沿いの緑がまぶしい光を放っていた。



唐桑海の体験センターのHPから

筏は大きな竹筒を格子状に組んで作ってあ

った。そこに横付けする。同行の竹井さんと徳野さんが恐る恐るその上に上がり、載せて来た貝を挟んだロープを海中へと垂らしていく。私はそのロープを渡した。

帰りには、その同じ筏に吊るしてあった稚貝付きの帆立貝の束を引き上げ、持ち帰った。畠山さんはサービス精神旺盛で、帰路に迂回して沖合に出、向かいの気仙大島の景色が見られるコースをたどってくれた。こうして、一日の作業を終えた。

藤浜の竹林で

11月5日朝、この日は昨日から同じ藤浜の竹林で行っていた竹の搬出作業に合流した。メンバーには我々の他に、今回も日本財団からの学生が参加。総勢二十数名で切り出した枝葉を軽トラに載せ、鮎立の一つ南の小鮎の捨て場とを往復した。

作業には若い人の参加が多く、明るく活気づいていた。またここでも、今朝からRQに参加したメンバーの中に、オーストリア出身の青年がいたり、学生の中にチュニジアから成蹊大学に留学中の女子大学院生がいたり、世界から注目され多くの支援を受けている現実を見ることになった。日本財団の学生達も、この唐桑の鮎立に借り上げた集落からの参加だそうで、腰がすわった支援が続いている。

ところで、私も枝葉が積まれた荷台に乗って、捨て場に同行した。谷一つ埋め立てたような奥へと広がる捨て場には、各地から出た廃棄物が、野天のまま広い範囲に積まれていた。その入口で管理に当たる警備員の制服を着た老人に入場許可をもらおう。この時、おもしろい経験をした。この老人の語る言葉が、我々にはほぼ理解できなかつたのだ。聞き取りにくい方言というレベルを超えていた。前にも後にも、したことのない経験だった。許可されたのか否かもわからぬまま、その老人

の中へとと言う合図で無事捨てに入ることができたのだが・・・。

晴天となった昼時、浜に出て堤防の上に坐っての食事となったが、慌て者の学生が足場を踏み外して海中にドボンと沈むハプニングがあった。途端に浜の漁師さんがかけつけ、小船を出して引き上げた。その学生に「俺んち寄って着替えて行け」と促した。こうした善意が、被災地ではごく自然に受け止められる雰囲気がある。暖かい秋の一日、そんな光景が見られた。

了